

『卯の花の咲く場所で』

ーサンプル台本ー

作：織部 秋月

* キャラクター

柊芽衣(ひいらぎ めい) — 主人公。父の死をきっかけに遺品整理をする中で、自分の知らない少女の写真を発見し、隠された家族の過去を追う。物語を通じて、自分に姉がいたことと、その死の真相を知る。

柊幹介(ひいらぎ かんすけ) — 芽衣の父。工場技師として無口生きてきたが、実は長女の死を一人で背負い続けていた。毎年同じ日に花を買い、墓参りを続けていた。

葉子(ようこ) — 芽衣の母。長女・卯月の死という事実を「なかったこと」にしようとした人物。娘(芽衣)に罪悪感を背負わせたくないという思いから、真実を隠し続けてきた。

柊卯月(ひいらぎ うづき) — 芽衣の姉。幼い頃、池に落ちた芽衣を助けようとして代わりに命を落とす。戸籍からも記録が消され、家族・近所の人々の間で長らく「存在しなかったこと」にされていた。

蔦彦(つたひこ) — 幹介の弟、芽衣の叔父。事故現場に居合わせながら二人を助けられなかった負い目から、兄(幹介)と疎遠になっていた。

苔沢チヨ — 隣家に住む老婦人。少女の存在について何かを知りつつ、最初は口を閉ざしていたが、最終的に手がかりを与える。

* あらすじ

父・幹介の葬儀の後、遺品整理をしていた主人公・柊芽衣は、古いアルバムの中に見覚えのない少女が家族と一緒に写る写真を見つける。写真の裏には父の筆跡で「この子のことは、絶対に忘れないでくれ」という謎めいた言葉が残されていた。

母に尋ねても言葉を濁され、商店街の人々も一様に「知らない」と口をそろえる不自然な反応に、芽衣は違和感を募らせていく。父の書斎からは、毎年同じ日にだけ赤い丸が付けられたカレンダーが見つかり、行きつけの花屋では、父が毎年決まって同じ花——卯の花——を買っていたことを知らされる。

隣人の老婦人や叔父・蔦彦への聞き込みから、少女の名前が「卯月」であることが判明するが、なぜその名前がこれまで一度も家族の口に上らなかったのか、答えは見えない。

さらに古い日記の破られたページ、市役所の戸籍記録、そして図書館の古い新聞記事を辿る。

—その核心は、母の口から語られる衝撃の告白によって、物語の終盤で明らかになる。

第一章 知らない少女

父が死んだ。

斎場の空気は、線香と冷房の匂いが混ざり合って、どこか現実味のないものだった。

娘である私、柊芽衣は、喪服の袖口を握りしめながら頭を下げ続けていた。

「この度はご愁傷様です」という言葉を、もう何十回聞いただろう。

その度に「ありがとうございます」と返す自分の声が、他人の物のように遠くで響いていた。

隣に立つ母・葉子は、涙を堪えるというより、涙の出し方を既に忘れてしまったかのような顔をしていた。

私はちらりと祭壇を見上げた。遺影の中の父・幹介は、珍しく笑っていた。

生前の父は無口で、何を考えているか分からない人だった。

工場の技師として四十年近く働き、家に帰れば新聞を読むかテレビを見るか、それだけ。

娘の私に向かって笑いかけることなど、記憶にある限りほとんどなかった。

「...こんな顔するんだ」

私は、遺影の中の父が、自分の知らない誰かのように思えた。

次々と弔問客がやってくる。

父はそんなにも親交のある人が多かったのだろうか。

最期まで何も分からないまま、お坊さんの読経を聞き、火葬場まで流れるように進んでいった。

骨壺に収まるほどに小さくなった父を家に連れ帰り、私と母は疲れた体を布団に横たえた。

葬儀から数日後。私は実家の和室で遺品整理をしていた。

段ボールが積み上がり、畳の上には古い衣類や書類が散らばっている。窓の外では、四月の生ぬるい風が庭木を揺らしていた。

押し入れの奥、埃をかぶった木箱の中から、一冊の古いアルバムが出てきた。

表紙の布は所々擦り切れ、金の箔押し文字はほとんど読めなくなっている。芽衣は膝の上でそれを開いた。

ページを捲るたび、若い頃の両親の姿が現れる。

海辺で笑う二人。庭先でぎこちなく肩を並べる二人。そして幼い私。

その一枚で、指が止まった。

真ん中に父・幹介が立ち、隣に母・葉子。

その前に、三歳くらいの幼い自分が満面の笑みを浮かべている。そして、もう一人。

自分よりいくつか年上に見える少女が、幼い私の手を握るようにして、隣に立っていた。

少女ははにかんだ様子で、優しい雰囲気を出している。

しかし私の記憶には、この少女の記憶は一切存在しなかった。

「...誰、これ」

声を出してから、自分がひどく動揺していることに気づいた。指先がその一枚の写真の端を、強く握りしめていた。

襖の向こうから、台所に立つ母の声がした。

「芽衣。お茶淹れたから、少し休憩にしない？」

私は写真をアルバムから抜き取ると、立ち上がった。

畳の感触が、いつもより硬く感じられた。

居間のテーブルに湯呑みが二つ並んでいる。私は母の前に、アルバムから抜き取った写真を差し出した。

「お母さん、これ。この子、誰？ 私の隣にいる子。」

母は湯呑みを持ち上げようとしていた手を、ほんの一瞬だけ止めた。

だがそれは瞬きほどの短さで、すぐに何事もなかったかのように動き出す。

「さあ...、近所の子じゃない？ 昔はよく遊びに来てたから」

「うちの庭で、うちの家族のど真ん中に写ってるのに？」

私の声には、自分でも驚くほどの棘があった。母は目を合わせてくれない。湯呑みの湯気だけを見つめていた。

「そんな子、家族に居なかったでしょう」

その言い方に、私は違和感を覚えた。否定にしては、あまりに平坦だった。まるで何百回も練習してきた台詞のように。

私はふと気になって、写真を裏返した。そこには父の筆跡で、こう書かれていた。

『この子のことは、絶対に忘れないでくれ』

母の喉が、小さく動いた。ほんの僅かな、しかし確かな反応だった。

私が母にそのことを言おうと口を開きかけた時、母は湯呑みを置いて立ち上がった。

「昔の事だから、お母さんも忘れちゃったのよ」

そう言って、母は逃げるように台所へと消えていった。

私は一人、居間に取り残された。

写真の中で、見知らぬ少女はただ変わらず、優しい雰囲気微笑んでいた。

第二章 家族の嘘

結局、母にはあれ以上何も聞けないまま、翌日を迎えた。

私は遺品整理の続きを始めようと、父の書斎に入った。そこで、古い卓上カレンダーの束を見つけた。

何十年分もの薄いカレンダーが、輪ゴムでまとめられていた。

一枚一枚捲っていると、ある共通点に気づいた。

毎年、四月のある一日にだけ、赤いペンで丸が付けられていた。ほかの予定は一切書かれていないのに、だ。

ただその日だけ、赤い丸。何十年分、ずっと同じ日付に。

私は、カレンダーを重ねながら、背筋に冷たいものを感じた。

父は、何かを忘れないために、これを持っていたのだ。

この赤い丸、母の反応、そして、写真の中で優しく微笑む見知らぬ少女。

何かある。

そう確信した私は、遺品整理をいったん中断し、何か手がかりはないかと、あの写真と共に街へ繰り出した。

もし仮に、少女が家族だったのだとしたら、近所の人や幼い頃から通っていた商店街などで見た人がいるはずだ。

私の住む街の商店街は、幼い頃から活気が溢れ、いつも賑わっていた。

それは今でも変わらない。

肉屋さんのおばさんにコロッセを一つおまけしてもらったこと。

魚屋さんのおじさんがいつも学校帰りに声をかけてくれていたこと。

この商店街での記憶は全て覚えている。

けれど、少女の記憶はない。

私は一軒一軒、馴染みの店に聞いて回った。

しかし返ってくる言葉は、みな一様に同じだった。

「そんな子は知らない」

「芽衣ちゃんの記憶違いじゃないかい？」

そう言う商店街の人々はどこか、怯えた様子だった。

何か知っている。知っていて、口を閉ざしている。私には、そう思えてならなかった。

だから、藁にもすがる思いで、商店街最後の店、花屋さんに足を踏み入れた。

白髪の店主さんが、丁寧に対応してくれた。私が差し出した父の写真を見て、懐かしそうに目を細めた。

「ああ、柊さん。毎年この時期になると、必ず来てくれたよ」

「...うちの父、花が好きだったんですか？」

「花が好き、というより、いつも同じ花を買って行ってたんだよ。『これじゃないとダメなんだ』って。ほらこれ。卯の花。」

卯の花。なぜ父はこんな小さな花を買っていたのだろうか。

しかも家には飾られているのを見たことがない。

どこへ持って行っていたのだろうか。

新たな謎が増えたが、それが確信に繋がっている気がしてならなかった。

答えは、まだ先の先。けれどこの謎が無意味ではないということだけは分かっていた。

商店街からの帰り道、隣の家で長年一人暮らしをしているお婆ちゃん、苔沢チヨさんが縁側でお茶を飲んでいた。

私は久しぶりに声をかけ、一緒にお茶を嗜んだ。

その時に、チヨさんにも聞いてみた。写真を見せ、この少女は一体何者なのか、父がなぜ忘れるなど、写真の裏に遺したのか。

チヨさんの皺の刻まれた顔に、迷いのようなものが浮かんでいた。

「あんたのお父さん、毎年同じ場所に行ってたんだよ」

「それって、どこですか？」

「...どうして、私に聞くんない？お母さんにでも聞いたらいいいじゃないか」

「母は、何も答えてくれませんでした。それどころか、商店街の人たちも、みんなはぐらかすようなことを言ってる...」

チヨさんはしばらく黙り込んでいたが、やがて覚悟を決めたように写真を指差した。

「昔ね、この写真に写ってる、もう一人の子。この子の事、この辺じゃ誰も、口に出しちゃいけない空気があったのよ」

その言葉は、静かな夕暮れの中で、やけに重く響いた。

私は、チヨさんのその言葉で決意した。何が何でも、母に話を聞こうと。

もう遠慮せず、納得するまで話そうと。

その夜、家に帰り、夕飯を食べ終わった後で、母に詰め寄った。

「お母さん。やっぱり教えて、この子の事。お父さんが毎年同じ日に花を買ってどこかへ行ってた。隣の家の子ヨさんも、商店街の人も、みんなはぐらかしてた。みんな一体、何を隠してるの？」

「...知らない。」

母の声は、明らかに揺れていた。私は畳みかけた。

「お願い。どんな真実でも私は驚かないから。ちゃんと教えて。この子は誰なの？」

長い沈黙が流れた。時計の秒針だけが、やけに大きく聞こえた。

母はようやく、絞り出すように口を開いた。

「...薫彦さんに、聞きなさい」

第三章 消された少女

薫彦おじさんは、父の弟にあたる人だ。小さい頃はよく遊んでもらっていたが、大人になってから疎遠になってしまっていた。

そんな薫彦おじさんの家を訪ねたのは、母にあの少女の事を聞いた、その数日後だった。

「兄貴の事なんて、俺は何も知らないよ」

快く出迎えてくれた叔父さんは、私を居間に通して、お茶を淹れながらそう言った。

「でも、父関係の事は、母から叔父さんに聞けと言われて来ました」

「...それで？何のことを聞きに来たのかな？」

「これです」

私は、例の写真を叔父さんの前に差し出した。

叔父さんの視線が、優しく微笑む少女の顔に落ちた瞬間、その表情が、確かに強張った。

頬の筋肉が引きつり、目の奥に何かが揺れた。

「叔父さん、今、顔色変わりましたよね」

「...気のせいだよ」

「この子の事、何か知ってるんですね」

叔父さんは視線を逸らしたまま、しばらく動かなかった。だが、私も引く気はなかった。

「お願いします。何でもいいんです。この子の事、教えてください」

やがて叔父さんは、まるで何かを諦めたかのように、小さく息を吐いた。

「...卯月。その子の名前は、卯月だ」

卯月。

その名前が、部屋の空気に重く沈み込んだ。

私は初めて、明確な手掛かりを手にした。そして同時に、新たな問いがまた生まれた。

何故その名前が、これまで一度も母や父の口から出てこなかったのか。

その事実を持って帰った、その夜遅く。

私は、父の書斎で古い日記帳を見つけた。

ページを捲っていくと、ある一年分だけ、大量に破り取られていることに気が付いた。

紙の破片が、綴じ糸のあたりにわずかに残っているだけだった。

残されたページの端に、掠れた文字で、こう書かれていた。

『...を守るために、卯月じゃない、芽衣を...』

文の途中で、そこだけ紙が破れている。私はその空白を埋めるように、しばらく文字を見つめ続けた。

父は、何かを隠したんじゃない。

何かを、守ろうとしていた。

そんな確信だけが、胸の中で静かに形を持ち始めていた。

次の日、私は朝早くから、市役所の戸籍窓口を訪ねた。

自分の戸籍謄本を取り寄せるためだ。

窓口の職員は、丁寧に、しかしどこか事務的にこう告げた。

「大変申し訳ありません。こちらの戸籍にお姉様にあたる方は記載がありませんでした」

その言葉は、想像していたよりもずっと重く、私の胸に突き刺さった。

存在した人が、公的な記録の上では、最初から居なかったことになっている。

そんなことが、あっていいのだろうか。

私はその足で、市立図書館へ向かった。

郷土資料コーナーで、古い地方新聞のマイクロフィルムを、一枚ずつ丹念に確認していった。

もし、姉が何かの事件や事故に巻き込まれて居なかったことにされたのなら、何かしら情報が残っているはずだ。

そんな私の予感、嫌な形で、見事に的中した。

目が疲れ、何度も見失いそうになりながら、ある記事に辿り着いた。

見出しには、こうあった。

『近隣の公園で幼児2名が池に転落、1名死亡』

小さな活字の中に、『柊卯月ちゃん(8)』という名前があった。

息が止まりそうになりながらも、震える指先で、記事のコピーを取った。

「...お姉ちゃんは、実在した...」

喉の奥から声を絞り出すように、私は呟いた。

家路へとつく。心なしか足早になっている気がした。

早く、早くこの真相を母に聞かなければ。

姉が居たこと、公園の事故で亡くなっていたこと、その後、戸籍からも削除されていたこと。

アルバムから見つけた小さな写真一枚が、こんな事態を招くなんて、予想もしていなかった。

私は家に着くなり、母の前に新聞記事のコピーを突き出した。

「私にはお姉ちゃんが居た。卯月って名前。事故に遭って亡くなった。戸籍からも削除されてた。...なんで今まで教えてくれなかったの」

矢継ぎ早に出た私の言葉を、母は受け止めるように最後まで聞いていた。

記事のコピーを見つめながら、何年も、何十年も、押し込め続けてきたものが、今にも崩れ落ちそうな顔をしていた。

やがて涙を堪えながら、震える声で言った。

「...その日、公園の池に落ちたのは...、あなたよ、芽衣」

「...え？」

「卯月は、あなたを助けようとして、池に飛び込んだの...。それで、そのまま...」

母は、その先を言葉にできなかった。代わりに、俯いた方が小さく震えていた。

第四章 父が守ったもの

母から衝撃の事実を伝えられた、その日の夜。私は夢を見た。

幼い自分の手を、誰かがぎゅっと握っている。温かく、それでいて必死な力だった。

その手の主の顔は、記憶の奥で霞んでいて、輪郭さえもはっきりしない。

「大丈夫。芽衣は、私が守るから」

優しい声が、耳元で響いた。

次の瞬間、冷たい水の感触。全身を包む重さ。そして握られていた手が、ふっと離れていく感覚。

私は、はっと目を覚ました。頬には涙が伝っていた。暗い部屋の天井を見つめながら、震える声で呟く。

「...お姉ちゃん」

その一言が、二十年以上も閉じ込められていた記憶の扉を、静かに開いた。

その後、あまり眠れずに朝がやってきた。

母から居間に呼び出されると、蔦彦叔父さんが座っていた。

窓の外は曇り空で、部屋の中には重い沈黙が満ちていた。

母が、ようやく口を開いた。

「...あの事故の後、お父さんは自分を責め続けたの。卯月を助けられなかった、自分のせいだって」

叔父さんもまた、視線を落としたまま続けた。

「...俺も、あの場に居たんだ。二人を止められなかった。それからずっと、兄貴とはまともに話せなかったんだ」

「わたしは...あなたに罪悪感を背負わせたくなかったの」

母の声が、初めて震えを隠さないものになった。

「だから、卯月が居た事ごと、なかったことにした」

私は、しばらく黙って二人の言葉を受け止めていた。

お姉ちゃんは、私を助けるために、池に飛び込んだ。

そして、私だけ助かった。

その事実を、母は消そうとした。街の人たちも、口をつぐんだ。

けれど父だけは、自分を責めながらも、その記憶を消さずにいた。

私は、静かに口を開いた。

「お父さんは、違ったよ。自分を責めながら、でもその記憶は消そうとはしてなかった」

私は鞆から、あの日記の切れ端を、ふたりの前に差し出した。

「毎年、お花を買って、お墓に行って。誰にも言わずに、ずっと一人で覚えてた」

母も薦彦叔父さんも、言葉を返せなかった。

「家族全員が、それぞれ違う理由で、卯月お姉ちゃんを隠してた。私を守るためだったとしても...
それじゃあ、卯月お姉ちゃんも浮かばれないんじゃない？」

その言葉は、責めるためのものじゃなかった。

ただ、二十年以上かけてようやくたどり着いた、静かな真実だった。

母の目から、堰を切ったように涙が溢れていた。

この夜、私は遺品整理を再開した。

小さな段ボールの中身を分けていると、古い書類の隙間から、一枚の写真が滑り落ちた。

拾い上げて、息を呑む。

幼い私と、幼い卯月が、二人だけで写っている写真だった。手を繋ぎ、二人とも屈託もなく笑っている。

裏を返すと、そこにも父の筆跡があった。

『卯月、芽衣を守ってくれてありがとう。お前の事は、俺が一生忘れない。』

私はその写真をそっと胸に抱きしめた。ぼろりと涙が頬を伝ったが、それは悲しみだけではなかった。

数日後、卯の花が咲く季節の中、私は一人、お姉ちゃんの墓の前に立っていた。

墓前には、真新しい卯の花が供えられている。

「お姉ちゃん、遅くなってごめんね」

花を供え、しばらく無言で佇む。風が吹き、白い花びらが小さく揺れた。

「今年からは、私が持ってくるからね」

鞆から、あの家族写真を取り出し、そっと見つめる。写真の中のお姉ちゃんは、変わらず笑っている。

「...守ってくれて、ありがとう」

父は、お姉ちゃんの存在を消したかったんじゃない。

花が咲く場所を、一人で守り続けていたんだ。

私はお姉ちゃんに別れを告げ、歩き出した。

ふと立ち止まり、空を見上げた。

風に揺れる卯の花の向こうに、どこまでも続く春の空が広がっていた。